平成二十七年度

（児童指導員科）入学試験問題

国　語

試験時間　九：三〇～一〇：三〇

（注　意）

一　係員の指示があるまで、問題用紙及び解答用紙に触れないで下さい。

二　問題は二頁～十四頁に印刷されています。

三　解答用紙に氏名，受験番号及び受験科目名を記入して下さい。

四　解答方法は次のとおりです。

例　〔一〕埼玉県の県庁所在地として、正しいのはどれか。解答番号は 1

①　前橋市　②　甲府市　③　さいたま市　④　横浜市　⑤　千葉市

〔一〕の正答は「③　さいたま市」ですから解答用紙の解答番号１の横に並んでいるマーク欄の中の「③」を鉛筆またはシャープペンシルで「●」のように塗りつぶして下さい。

五　机の上には鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、時計（計算機能のついていないものに限る）、受験票以外は置かないで下さい。

六　受験票は番号札の手前に置いて下さい。

七　マスクを着用している者は、試験官が本人を確認する間、マスクを外して下さい。

八　ハンカチ、ティッシュペーパーを使用する者は、静かに挙手をして、係員の指示に従って下さい。

九　試験中に気分が悪くなったり、トイレへ行きたくなった者は静かに挙手をして、係員の指示に従って下さい。

十　試験問題に関する質問は一切受け付けません。

十一　途中で退室する者は、解答用紙を机の上に置き、静かに挙手をして、係員の指示に従って退出して下さい。ただし、試験開始後三〇分間及び試験終了前一〇分間の退出は認められません。

十二　試験終了後、試験問題は持ち帰って結構です。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

秋田県大曲市に農業科学館がある。一般公開されているミュージアムだが、平日は見学者も少なく閑散としている。その分、勝手気ままに歩き回ることができるし、展示館にとどまって静かに(ア)シサクすることも自由だ。敷地は広大で散策もいい運動になる。

その一角に古い民家が移築され保存されている。背景の山と地面に溶けこむような、くすんだ色の農家だ。柱は太くて頑丈で、まだ何十年も持ちそうである。なかには囲炉裏があり土間がある。土間つづきには薄暗い奇妙な部屋が設けられている。部屋というより板で囲われただけの大きめのコーナーといった感じだ。わたしは最初、農機具の倉庫だろうかと思った。案内の人が笑いながら教えてくれた。

それは実は馬小屋だった。家畜小屋と住まいが一体となっているのだ。馬は農作業の重要な「道具」であり「財産」である。そこが農機具の倉庫だと思ったのも、［　I　］あたっていたことになる。それにしても農耕馬だ。きっと数百キロの巨体から放たれる臭い、そして糞。夏はハエもたかっていたのではないかと思う。まな板を毎日、化学薬品で(イ)サッキンしなければ気がすまなくなった現代人には、まずは絶対に住めない家かもしれない。だが一九六〇年代まではこんな住まいがまだ田舎には散在していたのである。

土間の床はしっかりと固められてコンクリートのようにしまっている。とはいうものの手で撫でてみると感触はやはり地面である。広さは車が二、三台はゆうに入りそうなほどもある。

なぜ、こんな広さが必要だったのだろうか？ 板で床をつくれば、りっぱな一部屋が確保できただろうに。いうまでもなく土間は単なる玄関スペースではない。そこは農機具を置く場所であり、雨天や夜間は農作業場として使用されていた。つまり仕事場だったのだ。

そこではいったいどんな光景が展開されていたのだろうか。祖父母、父母、そして子どもたちも加わった一家総出の作業もあったかもしれない。まだ仕事に加われない幼子は、囲炉裏端からそれを眺めていたのだろう。

家族の協働作業が展開される。かつてそういう光景が存在したはずだ。そのとき家族は仕事を通して好むと好まざるとにかかわらず結びついていた。家族は老人から子どもまで労働力そのものだったのである。A<u>ここには住まいのなかに仕事場があり、働くことを通して家族が成立していた</u>。ただただ、みんなで働いていたのだ。みんなで働かなければ生きていけなかった。

そんなとき「最近、うちの家族はコミュニケーションが少ない」などという悩みがどれほどあったのだろうか？ コミュニケーションという考え方そのものが、家族のなかにはほとんど存在しなかったのではないだろうか。ここでいうコミュニケーションとは、互いに「自分の考え方」を述べ合うことであり、人間関係を深める対話のことである。

住まいのなかに仕事場があるのは何も農家だけではなかった。都市の商店も町工場も職人の家も同様だった。かつてそこでは、子どもが店番をし、掃除をしている姿を見かけることもあった。手伝いをしながら親の働く後ろ姿を見る時代もあったのだ。住居部分と一体となっている商店はいまでも存在するが、もはや形だけに近い。

住まいと仕事場が一体となっているということは、家族がともに働くことで結びつい

ていたということでもあるのだ。それは日本だけの特殊な状況ではなかった。どんな国でも同じだったのだが、まずヨーロッパで住まいと仕事場が分離しはじめる。そして、住むためだけに存在する建物が誕生する。これがつまり住＝宅である。

明治政府は近代的生活、近代国家の証として、国民に「住宅」で暮らすように求めた。それは当時行われたさまざまな生活転換の一つだった。草履から靴へ、着物から洋服へ、そして「仕事場を分離した」住宅へと人々を(ウ)ユウドウしていった。

そのおかげで子どもには自由時間が生まれ、女性たちはそれまでの生産労働と家事労働をともに背負いこむという過酷な状態からいくぶん解放された。

だが、仕事が住まいの外部に流出したとき、同時に[B]家族を維持する「基盤」が家族の目から見えなくなっていった。

家族から[C]労働を通した身体的なつながりをなくしてしまったその分、家族は抽象的な人間関係になったのだ。そのことは子どもにとって、どんなことを意味したのだろうか？

よく子どもが親の職場を訪ねるという試みがニュースになる。何のためだろうかと思う。働く親の姿を見ると、ふだんはリビングルームでビールを飲みながらステテコ姿でテレビを見ているだけの父親が、少しは偉く見えるということなのだろうか。だが、いったん抽象化された家族基盤を発見することは、そんなことでは(エ)ムリだろう。

というのも、住まいのなかに仕事場があった時代の「良さ」は、働く親の姿を見せられるという点にあったわけではない。子育てなどという家庭の役割が意識されないほどに、子どももまた働かなければならないという厳しい現実が「家族の結びつき」を強めていた。

必要なのは子どもに親の仕事をかいま見せることではなく、いっしょに働くことだったのである。そのことで、夫婦には、あるいは親子には、家族という人間関係が身に染みついたのだ。だが、それは今日、ほとんど不可能といってもいい。いまの家族は家族の結びつきとしての協働作業を失ってしまった。（略）

経済力が比較的弱い国では、子どもはいまでも一家にとっては日銭を稼ぐ貴重な労働力だ。一方、欧米諸国では子どもに家事の手伝いを積極的にやらせている。父親とともにペンキを塗る子や芝を刈る子、食事の手伝いをする子の姿は失われた家族の協働作業を(オ)レンソウさせる。そういう意味で日本の親子には見事に何もない。アメリカの大学生は自分でローンを組み、学費を払う者も少なくないのに。

こんなことがあった。ある住宅会社が若手の社員に「自分がほしい住宅」というテーマでアンケート調査を実施した。住宅の理想像がよく分からなくなっているいま、つくり手も住み手も本当はどんな住まいがいいのか迷っている。そんな「混迷」状況のなかで、若い人の新しいアイデアや住まいへの意識を探ろうという試みなのだろう。

そのなかで上位に〈土間のある家〉が入った。若い人が住みたい家が〈土間のある家〉とは驚きだった。いったい、どういうことなのか？ わたしは一瞬、彼らが「失われた家族の絆」を土間が醸しだす「家族の協働性」というイメージに託そうとしているのか、と読みとった。

でも、すぐに[D]それは誤解だと悟った。回答者が土間のある生活を知っているわけではない。本当に知っている者はその空間の暗さ、冷たさ、土間独特の土臭さが思いださ

れて、そんな住まいをほしがったりはしないだろう、とわたしは思う。回答者のイメージのなかにあるのは、都会に最近よくある土間風の玄関スペースを設けた小ぎれいな料理屋といったイメージだったのではないか。土間への郷愁などではなく、レトロブームの装飾としての目新しさであるのだろう。

それは［　　Ⅱ　　］だ。イメージとしてはナチュラル、あるいは伝統的な雰囲気も漂わせている。でも、それは実質的な役割のない無駄、いっときの感覚的消費にすぎない。そして小ぎれいな料理屋がほぼ数年で室内を改装する現在、そうでなければ生き残れない消費時代にあって、住まいも土間もすぐにも消え去っていくのだろう。

土間の復活願望は、間違ってもあの時代にあの空間で行われた「家族の協働作業と絆」への復活願望などではない。なぜなら、わたしたちはもともと、家族で汗を流すことで得られる一体感など遠の昔に知らないのだから。

（出典　藤原智美『家族を「する」家』より）

問一　(ア)～(オ)の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 ～ 5

(ア) シサク

① 日米ガッサクの作品
② 問題部分はサクジョされた
③ サクバンのことでございます
④ 時代サクゴの考え
⑤ 書物のサクインを整える

(イ) サッキン

① キンサクに走りまわる
② きのこのキンシ
③ キンベンな働きぶりを見せる
④ キンセイのとれた体つき
⑤ キンキョウを報告する

(ウ) ユウドウ

① インドウをわたす
② 幼い頃に覚えたドウヨウ
③ ダイドウ小異
④ ドウヒョウを立てる
⑤ シャクドウ色に焼けた体

(エ) ムリ

① リレキ書を提出する
② 父母がいるキョウリを思い出す
③ 国のカンリとなって活躍する
④ 適切にショリをしてもらう
⑤ ヒョウリ一体をなしている

(オ) レンソウ

① 彼はセイレン潔白だ
② 剣術のレンマにつとめる
③ とてもカレンな花だ
④ レンボの情を抱く
⑤ レンガや俳諧をたしなむ

問二　空欄ⅠとⅡに入る文章として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 6 、 7

Ⅰ 6

① ずばり
② 間違いなく
③ 遠からず
④ ゆうに
⑤ とても

Ⅱ 7

① インテリア装置としての土間
② 家族の絆を確保する空間としての土間
③ 伝統回帰システムとしての土間
④ 恒常的な癒しの空間としての土間
⑤ 家族の一体感が得られる土間

問三　傍線部A「ここには住まいのなかに仕事場があり、働くことを通して家族が成立していた」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 8

① 働かなければ子どもたちは家族の一員として認められなかったこと。
② 住まいの構造が家族のあり方を基底でつくりあげていたこと。
③ 家族が皆で働くことでお互いの結びつきが得られたこと。
④ 働く場所としての土間が家族の成立には必要不可欠だったこと。
⑤ 経済的に余裕のない家では老人から子どもまで皆労働力とされていたこと。

問四　傍線部B「家族を維持する「基盤」が家族の目から見えなくなっていった」とあるが、この状況を筆者は一言で何と言っているか。その語句として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 9

① 抽象化
② 近代化
③ 分離化
④ 外部化
⑤ 自由化

問五　傍線部C「労働を通した身体的なつながり」とあるが、家族で仕事をすることで得られるものを筆者は何と考えているか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 10

① 親の仕事の現実的な厳しさ
② 家族同士の思いやりの感情
③ 親への尊敬と感謝
④ 家族としての一体感
⑤ 親の仕事に対する尊厳

問六　傍線部D「それは誤解だと悟った」とあるが、筆者がそう悟った理由として、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 11

① 土間のある家が持っているその独自な空間の暗さ、冷たさ、土臭さに未知の憧れを抱いていることがわかったから。
② 若者達が、土間というものを実質的な役割のない無駄、一時の感覚的消費に過ぎないことを認識していることがわかったから。
③ 土間のある家がもっていた伝統的な家族関係への拒絶反応が、若者達の理想的な住宅像の裏側に感じられたから。
④ 若者達は、今では見失われてしまった古臭く懐かしい生活を土間のある家にイメージしていることがわかったから。
⑤ 若者達はただ単に消費時代の感覚的なイメージに基づいて、土間のある家を望んでいることがわかったから。

問七　本文の内容に合致するものとして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 12

① かつての家族のなかにあった協働作業と結びつきの復活を願って、現代の住宅は伝統的な様式に回帰する傾向を見せている。

② 今の家族にはないかつての家族が具現化していた抽象的な人間関係が生まれたのは、明治政府の近代的な生活の提唱をきっかけとしてである。

③ かつての家族のあり方とは今では変容してきており、どんな住まいがいいのかそのあるべき姿も混迷状況にある。

④ かつての家族において現実的な労働力とみなされたのは、ある一定の年齢に達した成人だけであった。

⑤ 土間のある家に現代の若者が憧れるのは、かつての家族にあった結びつきがその家の様式に具現化されているからである。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

公共的な乗り物にシルバーシートなるものが出現してから、もうずいぶんときが経つが、私は、これが出現したときにかなり違和感を抱いた。おそらく少なからぬ人が疑問を感じたのではないかと思う。当時の投書などをあさってみれば、賛否両論でにぎわっていたはずである。しかし、今では(ア)既成事実に慣れてしまって、ほとんどだれもこのシステムに異を唱える人はいないようだ。だが、私の違和感は依然としておさまらない。

現在は「優先席」と名指しされて、老人だけでなく、障害者、妊婦、小さい子ども連れの乗客などの絵記号シールが張ってあるのを見かける。また、「お年寄り、体のご不自由な方、小さいお子さんをお連れの方には席を譲りましょう」といった放送が繰り返し流れてくることもある。

この場合、問いたいのは、これらの「弱者」をいたわる心情そのものの是非ではない。こういう枠組みをわざわざルールのように設定して、あなた方一般乗客は、どんな場合にも絵記号シールに該当する人を優先する心がけを持たなくてはいけないのですよと啓蒙しているような、押し付けがましい姿勢についてである。

私たちは、ごく普通の人間性を備えていれば、たまたま街や乗り物のなかで困っている人に出会ったときに、思わず援助の手を差し伸べるものだ。

もちろん[A]その意志の発動にはそれぞれに限定条件がある。その種の人がいることに気づいたとき、私たちのなかにはいろいろな心理が働く。たとえば、自分からは距離が遠すぎるから、近くの人がやってくれないだろうかとか、わざわざ人前で「善行」を示すのは(イ)スタンドプレイのように見えて気恥ずかしいとか、こっちは今仕事でくたくたなのだから他人になど構っていられないとか、この人は席を譲るほどいたわられるべき人だろうか、かえってプライドを傷つけられるのではあるまいか、など。

また、人間性といってもいろいろである。まわりによく気配りしている人もいれば、自己中心的であまりまわりのことなど考えていない人、親切の押し売りをしたがる人など。

これらは、ときに応じて複合的に作用して、席を譲る、譲らないの選択を条件づける。しかし、赤の他人が肩を触れ合う距離で接触しなくてはならない電車のなかのような空間では、こういう限定条件は、それが他に迷惑を及ぼすものでない限り、そのまま認められるべきなのである。「みんな、弱い人には優しい同情心を持つように常に心がけましょう」などという思想は、日常の個々の具体的な場面では、動機の一つとしての意味しか持たず、またそれ以上の強制的な意味を持つべきではない。

よく、「今の若い者は限の前に年寄りがいるのに、席も譲らない」などと、人の心の荒廃ぶりを嘆く向きがある。たしかに都会では、個人主義的傾向が進んで、眼の前に何があってもなるべくかかわりたくないという心理が、若者だけでなく、私たち一般に浸透している側面はある。それには、見ず知らずの他人に対する警戒心も手伝っているだろう。

しかし、(ウ)不届き者はいつの時代にもいる。また一方には、「茶髪、ピアスのおにいちゃんが、とても優しく親切にしてくれた。今の若者、捨てたもんじゃない」といった経験談のたぐいもたくさんある。そういうわけで私自身は、明確な「人心の荒廃」の兆候

などあまり信じないのである。逆にかつての時代が、そんなに良識あふれた時代だったとも思えないからだ。

人間のこういう部分というのは、あまり変わらないと思う。優しい人、冷たい人、積極的な人、消極的な人、いろいろいるが、眼の前の事態が深刻であれば、それに応じて援助の行動はそれなりにあらわれるものだ。重大な交通事故が起きたときや阪神・淡路大震災のときの人々の対応などを見ると、そのことがよくわかる。

シルバーシート、優先席のようなことさらな区画づけは、かえって、自然な接触による自然な同情心の発露を抑制する効果を生む可能性の方が高い。人々は、そういう区画づけの前に立たされると、概して「そこに座りたいという意に反して、仕方なく規則に従う」という心理的な反応しか示さない。

他の席がふさがっていて、立っている人がけっこういるのに、優先席だけは空いているという光景にしばしば接することがある。これは、優先席に座ることで、その該当者が乗り込んできたときに規則に従って立ち退かなくてはならない心理的な負担感を、あらかじめ避けようとするのである。多くの人が、そこに空席などはないものと見なすのだ。そのことによって、かえって人は、「弱者」との個別の接触を避けることになり、[B]そういう問題を自分で考えたり自らの意志で行動したりするきっかけを失うことになる。

（出典　小浜逸郎『「弱者」とはだれか』より）

問一　空欄(ア)～(ウ)の言葉の意味として最も適当なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 13 ～ 15

(ア)　既成事実

① 誰もが非難できない事実
② 昔からの伝統となっている事実
③ すでにできあがっている事実
④ 反論の余地のない事実
⑤ 今では習慣化した事実

(イ)　スタンドプレイ

① 自分を目立たせる意識的な行為
② 相手に配慮する思いやりのある行為
③ その場の状況をうまく取り入れた行為
④ 行為の結果を見据えながら行われる行為
⑤ あえて控え目にする奥ゆかしい行為

(ウ)　不届き者

① 付け届けを忘れる者
② おせっかいな者
③ 慎重すぎて失敗してしまう者
④ 腹黒い者
⑤ 法や道理にそむく者

問二　傍線部A「その意志」の指示内容として、最も適当なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16

① 援助の手を差し伸べようとする意志
② 困った人間を無視しようとする意志
③ 押し付けがましいことをやめようとする意志
④ 困った人間に出会おうとする意志
⑤ ごく普通の人間であろうとする意志

問三　傍線部B「そういう問題」とは、具体的にどのような問題か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17

① 優先席を設けるべきかかどうかという問題
② 「弱者」との接触を自分から避けること
③ 優先席が空いていても誰も座らないこと
④ 「弱者」とどのように関わっていくかということ
⑤ 優先席に座っている人の心理的な負担感

問四　本文の内容に合致しているものとして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18

① 今の人に比べて昔の人間の方が、人に対するやさしさが感じられる。
② 優先席のようなものの設置は、結局弱者との接触を回避させることにつながる。
③ 他者との関係のあり方は、その時代の状況に応じて変わってくるものである。
④ 公共空間での優先席のような弱者をいたわる仕組みは、人心荒廃の昨今必須である。
⑤ どんな人間でも、困っている人に援助の手を差し伸べようとする心情を持っている。

第三問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ものごとは、すべて完全でなければいけない、という哲学は、たしかに、ひとつの尊敬すべき哲学である。だらしがない、というのは、おおむね（　A　）なのだ。できることなら、ものごとすべて、きちんとしているにこしたことはない。

しかし、世界というものは、もともとかなり気まぐれな要素によってできあがっているものなので、なにからなにまで完全であることなんか、（　B　）。おまけに、人間という動物は、いささか知恵というものをもちあわせてはいるものの、その認識や判断には、かなりいいかげんな部分がある。だから、（　D　）というのは、じっさいには存立しえない立場なのだ。一般に完全主義と呼ばれるものは、世界のごく一部について完全、というだけのことにすぎないのである。そして、その一部について完全、という立場は、べつなことばでいえば、他の部分、ないし全体的な文脈についての無智あるいは無関心ということを意味するものであるから、完全主義者というのは、しばしば、どこかで間の抜けたものなのである。

（出典　加藤秀俊『日本人の周辺』より）

問一　空欄Aに当てはまる語句として、最も適当なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 19

① 知恵
② 美徳
③ 哲学
④ 悪徳
⑤ 尊敬

問二　空欄Bに当てはまる語句として、最も適当なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 20

① できた相談ではない
② 完全な相談ではない
③ できる相談だ
④ 意味のない相談だ
⑤ 意味のある相談だ

問三　傍線部Cが指し示している語句として、最も適当なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21

① 世界
② 人間
③ 要素
④ 文脈
⑤ 哲学

問四　空欄Dに当てはまる語句として、最も適当なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22

① 完全なる完全主義
② だらしがない人間
③ 気まぐれな世界
④ 間の抜けた哲学
⑤ 全体的な文脈での無智

児童指導員科　国語　正答

問題番号		正答
第１問	1	5
	2	2
	3	1
	4	4
	5	5
	6	3
	7	1
	8	3
	9	1
	10	4
	11	5
	12	3
第２問	13	3
	14	1
	15	5
	16	1
	17	4
	18	2
第３問	19	4
	20	1
	21	2
	22	1